
河岸 由里子

かうんせりんぐるうむ かかし

我流子育て支援論

～境界について～

「境界」と言われて何を思い浮かべるだろう？隣家との境？国境？健常と異常？内と外？考えたら様々なものが思い浮かぶだろう。

そもそも「境界」とはどういう意味であろう？辞典によれば、「事物や領域などを分ける境目の事」とある。何となく「境界」というと、「線」がしっかり引かれている感じがする。

例えば隣家との境界は、塀や境界線で分かりやすくなっていたりするが、隣同士で揉める事件もあるくらい微妙な問題ともなりうる。県と県などの境は、国が定めており地図上も線が引かれている。日本は島国なので、国境を意識することは少ないが、諸外国では陸続きで隣の国と繋がっており、国境が身近に意識される。

国と国との違いには、言語や風習、文化等様々なものがあって、隣国との違いを意識しやすいところもあれば、かつての東西ドイツや朝鮮半島のように、同じ言語、同じ民族の間で分断されている国もある。いずれにしろ、国境地帯や有刺鉄線、そして、検問ゲートなどで、国境が明確にされており、これを侵犯することは時には命を落とすことにもなる。

国と国との境界と言うものは、もちろん国益や文化の維持、病気の感染拡大なども含め、様々な問題上、尊重されるものになっている。とは言え昨今、竹島問題や北方領土の問題など、日本の周りでも摩擦が起こっている。そこには、資源の問題もあるし、歴史上の問題もある。一体どのように解決されるのか気になるところだが、戦争などと言った悲惨な事態にならないことを祈るばかりである。

話がそれだが、こうした境界のほかにも、管轄の境界と言うのもある。例えば、JR東日本とJR東海の境目はどうか？基本的に駅に境界を置くことはできないので、線路上に境界を引いているが、駅の管轄は意外とはっきりしているようで、重複しているところがあるなど複雑である。調べてみると、例えば東京駅や品川駅では、新幹線はJR東海、竿の他の在来線はJR東日本など路線によって分かれているため、両方の管轄になっていて駅長が二人いるそうである。

それでもこうした物理的なことは境界を明確に設定しやすい。しかし、こと人間の問題となると、明確な線を引けないことも多い。

社会面で考えれば、上流階級と中流階級との境目はどこにあるのか？年収で決めるのか？学歴で決めるのか？昔であれば華族制度があって、上流と言うのは華族・貴族等を示していた。その華族制度も廃止されて久しい今、自分が上流階級だと思っている人は、きっと金銭的に恵まれ、ある程度の邸宅を持ち、教育にもお金をかける事が出来、教養も十分身に付けているからと言う事になるのではないだろうか？自他ともに認められる場合もあるだろうが、一時「成金」と侮蔑的に呼ばれた人たちのように、金銭的な裕福さだけで上流と思っているような場合もあるだろう。中流階級も同様で、人の感覚によるところが大きいのである。

ほかにも、常識・非常識の境界など、全世界共通ではないものも多々あり、境界線を引くのは中々難しいが、そのような社会

の中で我々子育て支援者として、出来るだけはっきりさせたい「境界」もある。

今までも各巻で述べてきたが、今一度取り上げたいのが「大人と子どもの境界」である。

この「境界」はかつて、とてもはっきりしていた。「元服」や「十三参り」がその一つである。諸説あるが、男子は元服を迎えると髪型（月代を剃るなど）も変わり、大人として扱われた。年齢は15歳前後と言われているが、家のしきたりや長子かどうかで時期はまちまちであった。女子の元服では丸髷、お歯黒があり、年齢は16歳前後と言われているが、婚姻との関係も大きかった。十三参りは男子もあるが、女子で言えば、この時から本裁ち（大人の裁ち方）の着物に変わるなど、誰が見ても分かるような変化があった。

日本に限らず、民族によっては、大人になる儀式をしっかりと決めており、その儀式を通過しなければ大人と認めてもらえないこともある。そうした儀式の中で、入れ墨など見て分かるようにする文化もある。

儀式は本人の心境に大きな影響を与えるもので、また周りから見て分かる変化（髪形や入れ墨など）は、大人としての意識づけにとっても役に立つし、大人と子どもの境界をはっきりさせる。

現代の日本で言えば、「成人式」がその儀式にあたる。しかし、成人式が本当に大人と子どもを分ける境界になっているだろうか？十三参りはともかく、元服は年齢がまちまちと言うことを考えれば、20歳になったからと一律成人扱いするのはどうかと思う。

成人式に参加している人のインタビューを聞いていると、「大人として・・・」という言葉の口にしてしている。成人＝大人ということは頭では分かっているが、昨日までの自分と今日の自分、或いは明日の自分がそんなに大きく変わる筈もない。堂々とお酒が飲め、たばこを吸えることと、選挙権を得たと言う事以外に大きな変化はないだろう。特に見た目の変化はないのである。また、成人式に参加しないことも多いので、儀式の意味は薄らいでいると言えよう。

20歳は大学生であれば、まだ2年生。学生としては中途半端な状態で、突然大人になったと意識をするのは難しいだろう。運転免許だってもっと前にとっている。契約書に保護者の同意が不要になるという違いはある。

見えない部分での違いはあっても、目に見えて、この人は大人、この人は子どもと言う違いははっきりしない。特に最近では、子どもも大人も同じような恰好をし、女子では化粧もしているのいくつかわからない。

先日も小学校6年生の女の子と面談したが、背も高く、大人っぽい恰好をしていて、どうみても高校生にしか見えなかった。

化粧もおしゃれも大人と同じようにでき、夜の居酒屋にもいられるようになった子ども達。周りから見ても、大人と子どもの境界があいまいになったことでの弊害は、子どもが大人になりたいと思えなくなったことではないだろうか。

実際、子ども達も「めんどくさそうだから子どものままでいい」と答えることが増えた。

大人だけの特権がたくさんあった時代、「子どもは駄目」「子どもは早く寝なさい」などなど「子どもは・・・」と言われた時代には、大人だけが得をしているように思え、早く大人と同じことがしたい、早く大人になりたいと思っていた。某お茶漬け海苔の広告でも「大人って大人って・・・」というのがあったが、まさにその状態で子ども時代を過ごし、大人になることへの憧れを抱いていたのだ。

しかし、今の子どもたちは、大人になることに憧れなど持っていない。20歳になったから仕方なく大人になっているだけのように見える。

また、大人がいつまでも子どもっぽく、成長しないということもある。子育て中の父母を見ていると、余りにも幼くて、子どもが子どもを育てていると思えるようなケースも増えた。

自分がゲームをやりたいから子どもを怒鳴りつけて部屋から追い出す親。思い通りにならない子どもを殴る虐待親。虐待をする親は殆ど皆大人として育てていない。自分のやっていることを邪魔されたからと叩く親。自分が食べたいものを食べ、自分が嫌いなものは食卓に並べない。自分のお菓子を子どもが食べたからと怒る親にも出会った。早く大人にならなくてよい時代になったと以前に述べたが、親になるという事は、大人としての自覚を持って行動できなければ難しい。

子どもと同レベルでいつも喧嘩している父母、時には親子が逆転して、子どもの方が親の良ようにさせてあげているケースまである。「親の好きにさせないと、ギャー

ギャーうるさくて面倒だから」と言う。子どもが親に気を使い、顔色を見て行動していることもある。

親の側に力が無いから「境界」を引く事が出来ない。車の中に放置してパチンコをしている親よりは、夜遅く居酒屋に子どもを連れて行って、お酒を飲んでいる親の方がましかもしれないが、大差はない。

大人と子どもの間の「境界」を引くためには、大人側の力が大切なのである。子どもの機嫌取りをしているようでは引けないし、大人が未熟でも引けない。前回のメディアの話でも書いたが、子どものメディア漬けを改善するには保護者の力によるところが大きい。大抵の保護者はテレビを消すことが出来ない。

更に、親が子どもの自立を妨げているケースにも出会う。「可哀そう」と言っただけでは過保護・過干渉を続ける。親自身が自立していないから、子どもに依存する。子どもの方では大人になりたがらず、親の方も子どもを自立させようとしないうちに、大人と子どもの境界をどうすれば良いのか？

はっきりとした境界を引くのは個体差もある。難しいかもしれないが、結婚が認められる年齢は一つの目安ではないか？18歳になれば男子も保護者の了解の下結婚できる。即ち親になれる歳ということだ。選挙権を18で与えようという動きがあったと思うが、結婚が出来る年齢は境界としてふさわしいと思うがどうか？未成年を17以下にし、高校卒業までを義務教育にして、大人になるための準備をしっかりとさせればよい。

もし、現在のように20歳を大人と子ども

の境界とするのであれば、運転免許も結婚も20歳まで許可すべきではないだろう。今の状態は統制感が無い。

アメリカのように州法が様々な国ならともかく、単一民族（実際にはそうではないと思うのだが）と言われている日本においては、法律が地方によって異なるという事は無い。従ってもっとわかりやすい形にすべきと思う。

日本が一番そういう意味で大人と子どもの境界が弱いのもかもしれない。

大人と子どもの境界は、もっとはっきりすべきだし、その境界をしっかり守らせるために、我々支援者は、親になるための教育をして行かねばならない。それは、思春期前期から始めるべきであり、思春期の子を持つ父母教育も並行して行っていかねばならないのである。そうすることで、子どもは大人になることへの意識をはっきり持つ事が出来、大人になることへの憧れを抱けるのではないか？今のように大人の情報を子どもたちが何でも取り入れられる状態では、思春期をきちんと迎え、思春期の課題をクリアし、終えることが出来なくなるのではないか？引きこもり増加、長引く思春期の問題は、こうしたところに原因の一つがあると思うのである。

もう一つ、健常と異常の境界の問題を挙げたい。

よく話題となる発達障がいの境界では知能検査が指標になる。余程低ければ、精神発達遅滞の診断は簡単であるが、所謂境界知能である場合、療育手帳を申請出来るか出来ないかについて、揉めることが多い。

もちろん検査は知能検査だけではなく、幾つかの検査を組み合わせで行うし、医師の診断も含めて判断されているのだが、手帳を持っている人たちに聞くと、その境界の曖昧さが浮き彫りになる。

ある保護者は、子どもの状態についてどれだけ大変かを訴えたことで、IQは100以上あったが療育手帳をもらえた。もちろん広汎性発達障害の診断があつての事である。しかし、同じ広汎性発達障害の診断を受けていながら、IQ80以下であるにもかかわらず、手帳をもらえない保護者もいるのである。

療育手帳は都道府県が発行するもので、都道府県の児童相談所（18歳未満の児童は児童相談所、18歳以上は総合相談所や知的更生相談所）によって判断基準や程度が異なるという状況である。大体の基準としては、最重度が概ねIQ20以下、重度がIQ21-35、中度がIQ36-50、軽度がIQ51-75となっている。そして境界知能は先の基準によればIQ76-85（71~84と言う事もある）というところになる。しかし、知能検査にしても、児童の場合、本人の体調や気分によって多少の差が生じる。何回か期間を空けて判定するし、児童のうち2年ごとの再判定が一般的である。昨今広汎性発達障害の診断を受けて学校や幼稚園で集団に馴染めない子どもたちの判定が多くなり、園や学校での様子など、社会生活上の困難度を含め、総合的に判断しているが、それでも、IQ80以上の判定が出た子どもが、療育手帳を交付されたりされなかったりする。不公平と言えそうだが、直線状に並んでいる子どもたちを分断するのは難しい。

我々支援者としては、そうした状況を理解したうえで、保護者に診断や判定を受けさせるかどうかの判断をして行かねばならない。その基準は、「この子が将来自立する上でどれ程困難になるか」である。

高校や大学を卒業できても、就労が出来なければ自立は出来ない。就労するにあたって、例えばジョブコーチなどの支援が必要であるなら、卒業までに方向性を修正すべきであろう。

対人関係が難しければ、比較的対人関係の少ない職場を選ばねばならない。その子の知的レベルと社会性を十分に把握したうえで、どのような職場が適当か、その子の特技・得意な事を生かせる場が無いかの検討も必要になる。

今日の前にいる子どもが、今困らなければよいと言う考え方だけではいけない。この子の未来像を意識しながら、その子にとって最善の方法を模索すべきである。診断を受けさせ、障がい名を付けさせることだけで終わってはいけないし、場合によっては障がいと言うラベルが無くても、適材適所でやっていけることもある。

又何でもかんでも発達障がいと言ってしまふのも問題である。厳密に言えば多くの子どもが持っている特性が発達障がいの診断基準に入っているのだから、それを皆発達障がいと思ったら、健常児はぐっと少なくなるだろう。社会は多勢と無勢で分けられるところがあり、歴史上少数派は何時も差別されてきた。もし今健常児とされている子どもの数が発達障がい児より少なくなったら、健常と異常の区別が逆転することになる。そんな危険性を考えているのは筆者だけでもあるまい。

こうした社会的な境界のほかに、人の内面に関わる「境界」がある。自分自身の枠組みもその一つだ。

子どもたちは、自分たちの「境界」(枠組み)を小さくまとめすぎていて、広げようとしな。自分の枠組みを広げるのは、人との関わり以外にない。海外留学を望む子どもたちは減ったし、友人関係も少ない中で満足している。自分が好む人、同じタイプの人としか付き合おうとしな。段ボールや押し入れの中が安心する自閉的な子どものように、小さい世界が安心安全と感じているのだろう。自分に良く分かるタイプとの付き合いは、摩擦もなく苦労も無い。しかし、それでは成長はない。

そして、そのことと関連し、友達と親友の「境界」がある。

思春期の子どもたちの面談をしていると、「親友」と言える友達を作れずにいる子が多いと感じる。友達と親友の「境界」はどこにあるのか？

子ども達は「仲が良い」ということだけで「親友」と思っている。単に「仲が良い」のは、一緒にいつもつるんでいるだけで、それは「一人で居る事が怖いから」と言う事も多いし、「相手の話が面白いから」とか、「一緒にいると相手がしゃべってくれて自分が話さなくて済むから」とか、「きついことを言わないから」とか「こっちの話を聞いてくれるから」など、「互いに自分をぶつけ合い、分かり合い、損得勘定抜きで一緒にいて気持ちが落ち着く相手」として試している訳ではないのである。

子どもたちは一人になることをとても恐

れている。自分が浮いている状態にならないよう、必死に誰かと一緒にしようとしているのである。その根底には、「自信の無さ」がうかがえる。親は子ども達を褒めて育てた世代である。自分で自分を認められている子は、自信を持って活動し、一人で居る事も怖がらず、自分をさらけ出して親友を見つかる事が出来るだろう。しかし、親の希望に添うように、一生懸命頑張ってきた子どもは、自分で自分を認めることは出来ず、自信はなく、一人で居る事を怖がり、自分をさらけ出せない。自分をさらけ出せなければ親友は得られない。互いの良いところも悪いところも認め合えて初めて親友になるのだから。

筆者はよく子どもたちに、「自分を出して相手とぶつかりなさい」と言う。殴り合いの喧嘩をしろと言っているのではない。言語を使って議論をしたり、口喧嘩をしたり、思いをぶつけ合えと言っているのである。しかし子どもたちは躊躇し、喧嘩をしない。喧嘩をする前に止められてきたからである。相手に怪我をさせたら大変だからである。しかし、喧嘩をすることで自分をさらけ出し、相手の本当の姿も見られるのである。そしてお互いに謝ると言う行動も**人間だからこそできる**のである。**謝る、許すと言う行動を、人間らしい行動をとることで、分かり合える**のである。

手や足が出る喧嘩も何でもかんでも止めればよいと言う考えには賛成できない。小さいうちは口喧嘩が出来る程言語能力が高くないので、叩いたり、引っかいたり、かみついたりするものである。それも経験と思える大人側の許容量が必要である。もちろんやり過ぎないところで止めるべきでは

ある。

虐待か騷か、口喧嘩か議論か、いじめかじゃれ合いか、世の中「境界」が曖昧なものが多々ある。「境界」は、はっきり線引きが出来るものは線を引き、曖昧なもの、曖昧であるべきものは程々に境界を設定すべきであろう。我々支援者は、個々の事象について、「境界」をはっきりさせるべきか、曖昧にすべきかを判断しなければならない。その指標となるのは、「公平さ」や「わかりやすさ」、そして、「曖昧にする・はっきりさせる」ことの「メリットとデメリット」である。そのメリットやデメリットは、支援する側のものであってはならない。あくまで支援される側で考えるべきものである。

12章にわたる本論は、筆者の日ごろ思うところをまとめたものである。「境界」であれ、子育てであれ、子育て支援であれ、きっちりしようとするとう無理があることも多く、そういう意味では「適当、程々、好い加減」を軸に書いてきた。しかし、きっちりさせねばならない「境界」もある。

子育て支援は、「どこまですればよいのか？」という「境界」も意識し、自問自答を繰り返しながら、父母、子ども達の視点で考え、何が必要で何が余計なのか、よくよく考えて行うべきであろう。困っている父母に何でも手を貸せばよいと言うものではない。父母の自立性をどう育てるか、子どもの自立をどう支えるか、父母、子ども、家族全体の自己解決能力の向上を支援することこそが、子育て支援だと思う。